

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

田島充士



学位申請者：李奎台

論文名：韓国人留学生のキャリア形成における役割意識の変容-ライフ・スパン/ライフ・スペース理論的アプローチの枠組みから-

【審査結果】

田島充士を主査とし、副査として研究指導委員会より海野多枝、宮城徹、さらに外部審査委員として、東京大学より宇佐美洋、名古屋学院大学より安藤りかの計5名によって構成された審査委員会は、2018年5月30日午後1時～2時40分、本学中会議室にて上記論文の審査ならびに口述による最終試験を行った。

その結果、審査委員会は全員一致で、申請者に対し博士（学術）の学位を授与するのが適当であるとの結論に達した。

【論文の概要】

本論文は、今後ますます増加することが予想される、日本で就職することを希望する留学生を対象者とし、彼らがキャリア形成の過程でどのような役割意識を持ち、進路決定を行っているかを明らかにしようとするものである。申請者は研究設問として、①留学生はキャリア形成においてどのような役割意識を持っているのか。②留学生が留学前から日本で教育機関を修了するまでに持つキャリア形成における役割意識はどのように変容し、どのような要因に影響されているのか。③それぞれの時期（留学前と教育機関を修了する時期）に下した、将来のためのキャリア決定は、どのようなキャリア形成における役割意識の下でなされたのか、の3点を挙げている。

次に、本論文では、留学生の価値観に関する先行研究を、異文化的視点及び発達心理学的視点に分類して、広く検討する。さらに、本研究の中心的枠組みとなる Super のキャリア発達に関するライフ・スパン/ライフ・スペース理論について、検討している。

こうした基礎の上で、本研究では、6名の韓国人留学生に対し、半年から1年程度に渡って複数回、日本での留学生活全般にわたる深層面接を行っている。その面接の文字化資料を基に、ライフ・スパン/ライフ・スペース理論的アプローチによる分析を行い、各人の特徴と大きく役割変化を生み出す要因などについて検討している。

論文は、全6章により構成され、文字化資料集を伴う。総ページ数は本文306ページ、資料集321ページである。その特色は、幅広い先行研究の検討、半年～1年間にわたるインタビュー調査、Superの役割理論に基づく丁寧な分析にある。

以下、論文の構成に従い、章ごとに論述内容の概要を示す。

第1章：研究背景では、積極的に留学生を受け入れようとしている日本政府の政策を概観するとともに、留学生の日本での就職率の低さを取り上げている。次に問題提起として、企業と留学生の両者によって異なって捉えられがちな就労に関する価値観に注目する。その上で、企業及び従来の就職活動支援が、留学生の労働者としての価値観のみを見てきたことを、指摘している。さらに、価値観、役割意識、キャリアといった用語を定義し、研究目的と研究設問を提示した後、研究全体の構成図を示している。

第2章：先行研究のレビューとして、まず、申請者の扱う「留学生のキャリア形成における役割意識」に関しては、役割意識の代わりに、価値観、適応、変容、社会化という概念を中心に行われてきていることを指摘したうえで、異文化適応、異文化間教育などの分野で留学生の適応研究や価値観研究がどのように行われてきたかを概観している。次に、発達心理の観点から価値観の変容を捉え、EriksonやHavighurstの発達段階論を概観し、その延長線上にあるSuperの職業的発達段階論を紹介している。さらに日本における留学生のキャリア形成に関するこれまでの研究を概観している。その上で、留学生の適応研究や価値観研究においても、キャリア形成研究においても、これまでの研究が、留学生の複数の役割に注目して来なかったこと、その多くが量的研究であり、質的研究が不足していることを指摘している。

そこで、本研究では、留学生の複数の役割意識を捉えることができるSuperのキャリア発達に関する理論を採用すること、留学生一人一人の役割意識及びその変容についての詳細な記述と理解を可能にするために、質的縦断研究を選択したことを述べている。

第3章：ここでは、本論文の中心的枠組みとなるキャリア発達に関するライフ・スパン／ライフ・スペース理論的アプローチの説明と、この理論の四つの中心的概念である、キャリア自己概念、職業適合性 (vocational fitness)、ライフ・スパン (life-span)、ライフ・スペース (life-space) について詳しく説明している。さらにこのSuperの理論に対して示されてきた批判をも加味し、本研究での適用の方法についても論じている。

第4章：ここでは、調査方法について、主にインタビュー手順と調査対象者について説明している。

第5章：結果と考察の章である。ここでは、6名の調査協力者について、1名ずつ、来日前から最終インタビューまでの、本人の所属、方向転換を迫られた出来事などを表にまとめた上で、一つ一つの方針決定がどのような対人関係の中で、誰の意志で、どのように決められてきたのかを確認している。またその過程で、本人にどのような役割意識が芽生え、どのような過程でキャリア決定がなされていくかを図式化した上で考察している。特にこの図式化においては、個人の複数の役割がどのようにその割合を変えていくかについて明快に示している。章の最後において、この6名の役割意識の変化について、その共通点と相違点を検討している。その上で、大きな変化を生み出すこととなった出来事は、「環境及び立場の変化」「将来の自らの姿を想像する(場面)」「予想外の危機との遭遇」を挙げている。

第6章：総括として、研究設問に対する答えを整理した上で、本研究の結果と考察を基に、教育機関における留学生を対象とするキャリア支援に、六つの提言をおこなっている。それは①留学直後から、キャリア支援を開始すること、②そのキャリア支援においては、

個人が有する複数の役割意識を考えさせること、③日本にとどまらず、どこで働くかについても考えさせること、④就職制度面の情報整備、⑤留学生は留学前から、教育機関修了後の進路に関する役割意識を育む必要があること、⑥就職以外の進学についての可能性についても支援すべきであること、である。次に、本研究の意義として、まず Super の理論を用いて、複数の役割意識及びそれらの変容を、同時に扱い分析することができたことを挙げ、白人男性をモデルとして組み立てられた Super の役割意識と異なる結果となったこと、韓国人に特徴的と思われる役割が見いだせたことを述べている。第二の意義として、調査方法として母語を用いて、十分なラポールが形成できた段階でインタビューを実施したことで、協力者は自らの経験及び心情を、詳細に述べることができた点、そして、従来の研究に多かった「日本人－外国人」「教員－学生」という関係性ではなく、ピアとしてインタビューをした点を挙げている。第三に、質的分析手法を用いて、具体的な語りを提示しながら、分析の過程を詳細に記述できたことであると述べている。最後に、本研究で成し遂げられなかったこと、研究法上の問題点などの今後の課題について触れている。

発行論文及び学会予稿集と本論文の関連：説明略

注：説明略

参考文献：説明略

附録：説明略

【審査の概要及び評価】

審査は冒頭約 25 分間、李氏から PPT を用いて論文概要の説明があった。それに引き続き、各審査委員と李氏の間で活発な質疑応答が行われた。約 100 分の公開審査の後、審査委員会で最終意見交換を行い、上記の如く判断した。

具体的な審査の概要は以下の通り。まず申請者による論文概要の説明が PPT を用いて、簡潔に示された。続いて、外部委員、内部委員の順で、質疑応答が行われた。

どの審査委員からも異口同音に語られた本研究の長所は以下の通りである。

- ・念入りの先行研究の検討、そこからのオリジナリティに富んだ研究設問の設定、長期にわたる丁寧な面接調査、時間のかかる翻訳を伴う文字化作業によって得られた豊富なデータを扱っていること、協力者 6 名のキャリア形成における役割意識の分析作業など、提出者の粘り強い努力が十分に伝わってくる労作である。

- ・「日本人調査者－留学生協力者」「教員－学生」という関係性で行われる研究が多数を占める現状において、教会というコミュニティにおける対等な立場での母語でのインタビューによる質的研究という新規性を有する研究である。

- ・詳細なインタビューから、各協力者のライフストーリーを把握し、Super のキャリア理論の枠組みに従って、内容を精査している。また Super のデベロップメンタルモデルを用いて、各人のモデルを提示するという新たな試みに挑戦している点もオリジナリティに富んでいる。

・さらに論文執筆に関連し、4本の投稿論文、著書分担執筆、7回以上の学会・研究会発表等を行い、本研究の質を高めてきている。

一方、各委員から指摘されたコメント、疑問点は以下の通りであった。最初の委員からは、用語等の定義が不十分であり、例えば本研究の鍵概念である「役割意識」の中にも、自分のアイデンティティとしての役割意識と、そうしたアイデンティティを持つ者として自分はどうか振る舞うべきかというビリーフとしての役割意識が混在して論じられており、それが全体の論述をわかりにくくしているの、それらの関係を考察に加えるべきであったという指摘があった。また豊富なデータの中にみられた出来事の羅列にとどまり、抽象化が不十分ではないか、Superの提示するdevelopmental modelは、意思決定にいたるまでの内省のプロセスを表示するという側面があると考えられる一方で、本論文では出来事の提示にとどまっている部分が多く、抽象化が不十分との指摘もあった。また提言においては、例えば、どうしたらSuperの言う「探索段階から確立段階へ」の円滑な移行のサポートができるか、具体的な提言をして行くことが望ましいとのコメントがあった。

第二の委員からは、インタビューの分析部分においては、各事例の内容を概念化した上で、それを構造化する姿勢がもっと必要であるが、そのような概念化手続きを怠っているために、最後の考察が一貫性を欠くものになってしまっていると指摘された。今後は、概念化と構造化を踏まえた分析をすることで、質的研究でいう一般化可能性が得られるのではないかというコメントがなされた。

第三の委員からは、韓国人である調査者が、同じ教会に熱心に通う韓国人留学生に対して、韓国語でインタビューを行ったために、調査協力者と日本人との間のコミュニケーションに関する語りが十分に収集、検討されなかったことが指摘された。また同時に、教会関係者（宗教人）としての語りや関係性が論文中では取り上げられることが少なかったこと、ジェンダーの視点からの分析がないことなどを今後の課題として検討するよう指摘があった。さらにデータの提示、記述の方法などにも、細心の注意を払い、読者に誤解を与えず、よりの確かな情報を伝えるように努める必要があるとの指摘があった。

第四の委員からは、個々の役割意識の中身の議論が不足していること（例えば、異なる社会文化的背景を持つ留学生を対象とする場合、「学生」としての役割意識もかなり異なるはずであること）が指摘された。また複数の役割意識間のコンフリクトが起こる可能性についての論考がなされていないことも問題視された。さらに本論文ではあえて協力者の語りの詳細分析をしていないが、それによって重要な論点が見落とされていると思われることが指摘された。最後に、日本語の習得や異文化適応が役割意識の変化にどのように関連しているのかについても重要な論点となり得ることなどが指摘された。

第五の委員からは、自らレビューを行った主要な先行研究に、今回のケースを当てはめることで、より統合的な考察ができるはずであること、例えばそれにはエスニックコミュニティとしての教会組織が留学生の日本適応にどのように機能していたのかなどを検討してみることが提案された。また質的研究における調査者による気づきや解釈の提示と一般化可能性との関係性について、申請者はどのようにとらえているのか、再考が必要であろうという指摘がなされた。

総括すると、どの委員からも、データの分析と考察においてはさらなる精査と改善が望

まれることが指摘された。しかし以上の指摘は本研究の意義を損なうものではなく、むしろ今後のさらなる発展のための助言と捉えられるものである。本研究は、長期にわたって形成された調査協力者との十分なラポールの上で、豊富なインタビューデータを分析していること、ライフヒストリーを役割意識の変化によって分析するという新たな研究視点を採用したこと、韓国人協力者を留学前、留学中、留学後といった長いスパンで、キャリアデザインという観点からとらえたこと、学生に対する就職支援現場への提言まで盛り込んでいることは短所を補ってあまりある長所であると評価された。またデータ分析と考察の不十分さについても、公開審査においては、申請者からの的確な洞察と解釈が示され、今後の研究に反映されることが期待された。また現在特任教員として勤務している大学においては、留学生指導についても実践しており、社会に貢献しつつ、本研究のさらなる検証を行っている点も高く評価された。

以上のことから、総合的に判断した結果、審査委員会は全員一致で、申請者に博士（学術）の学位を授与するに値すると結論付けた。